

お芝居と朗読劇で楽しむ「菊池 寛の世界」



菊池寛の作品を、お芝居や朗読劇でわかりやすく楽しく公演することで、舞台芸術の素晴らしさを、子どもたちに伝えます。大人にも感動を与えられるよう演じます。(仁尾おどり保存会が「菊池寛音頭」を踊ります)

きくち かん
菊池 寛

明治21年(1888)、香川県高松市に生まれる。本名は寛(ひろし)。高松市立四番丁尋常小学校。高等小学校。県立高松中学校卒業。一高中退後、大正2年、京都帝大英文科に入学。第三次、第四次「新思潮」に参加、文壇にデビューする。「父帰る」「忠直卿行状記」「恩讐の彼方に」「藤十郎の恋」など戯曲、小説の名作を次々と発表。大正12年には「文藝春秋」を創刊した。昭和10年、芥川賞、直木賞を創設し、後進の育成にも努力を惜しまなかった。11年、文芸家協会初代会長となる。23年、狭心症にて急逝。享年60。寛の母カツ(加津)は、仁尾町宿入の出身。

◆ご観覧の皆様へ◆

- ※駐車場には限りがございますので、徒歩・自転車・乗り合わせ等ご協力をお願いします。(文化会館駐車場の他、仁尾支所駐車場・旧仁尾保育所跡駐車場もご利用下さい。)
- ※近隣の方の迷惑になりますので、路上駐車は絶対にご遠慮下さい。
- ※ホール内は原則飲食禁止となりますが、水分補給程度の飲み物は構いませんので各自ご用意下さい。

劇団ドラマ・サロン

- 「父帰る」
- 「鬼子母神とザクロ」(民話)
- 「落ちた雷」
- 「三人兄弟」

2016
7/23 (土)
13:30~15:00 (開場 13:00)

★入場無料★
仁尾町文化会館
1階多目的ホール

申込み・問合せ先
まちづくり推進隊仁尾 事務局 (市民センター仁尾内)
(電話での申込みは受付しません) TEL: 82-5207

締切日 7月15日(金)

≪ 切り取り ≫

「すくすく仁尾っ子シアターⅢ」 申込書		まちづくり推進隊仁尾	
氏名	住所	電話番号	備考

【お申込みは、まちづくり推進隊仁尾事務局まで】

父帰る

時代は明治四十年頃。二十年前に家を出た父が突然帰ってきた。父の家出のために家庭を守ろうと苦労した長男の賢一郎は受け入れない。そのやりとりに母と妹は泣き伏し、弟は父と兄を取り成そうとするが、賢一郎に拒まれた父は再び家を出ていこうとする……。

いつの時代にも家族にはドラマがある。

大正六年に高松を舞台にして描いた戯曲。文壇への地位を確立した作品。家族の情愛をテーマに新しいホームドラマとして注目された。上演されて幕が下りると、舞台を見ていた芥川龍之介も菊池寛自身までも泣いていた。

落ちた雷

都の医者が旅に出て、野原を歩いていた。急に夕立が降ってきたかと思うと、ゴロゴロ雷が鳴りはじめた。すると、すさまじい音を立てて雷様が空から落ちてきた。雷様は、雲を踏みすべらして、ひどく腰を打ったので、医者に治療を頼んだ。医者は、針治療で腰の痛みを直し、治療代を求めた。しかし、お金の持ち合わせがない雷様は、ある約束をして空へ帰って行った。

その約束とは、これから百姓たちが水に困らないようにすることと、医者を天子様お付きの医者にすることだった。

約束はどうなったのか……？！

鬼子母神とザクロ

鬼子母神は、女の神様で、たくさん子どもがおった。この神様は、恐ろしいことに、人の肉を食べることが好きで、人間の子どものをさらって来ては、その肉を食べていた。

ある時、お釈迦様が、それを諭すために、鬼子母神の大勢の子どもの中の一人を隠してしまった。鬼子母神は、無我夢中でわが子を探した。すると、お釈迦様が、「お前は、子どもがそんなに大勢いるのに、たった一人いなくなっただけで、それほど悲しむだろう。ましてや人間はわが子の数が少ないのに、なくした親は、どれ程悲しい思いをしていることか…。二度と、子どもたちをさらって食べたりなどするのではない。」と言った。鬼子母神は、自分の過ちを認め、それからは子どもをさらわなくなった。お釈迦様は、「人間の肉が食べなくなったら、このザクロを食べるがよい。」と言って、鬼子母神にザクロを渡した。

ザクロは、一つの実の中に又たくさん小さな実があり、その一つひとつがそれぞれに小さな種をもっている。このことからザクロは古くから子孫繁栄をあらわす縁起のよい果物として「吉祥果」ともいわれる。

三人兄弟

千年も昔のお話。ある村に三人の兄弟が居た。一つ違いの仲良しで、他人からは見分けが付かないほどよく似ていた。都に行けば運が開けるだろうと出発する。二日目の朝、大きな峠の頂上から都が見え、峠を駆け下りると、これまで一筋の道が三筋に分かれていた。兄弟は各自の道を選んで進む。が、それぞれの道には、数奇な運命が待ち構えていた。

十年たって、兄弟が再開したとき、検非違使の役人になった左衛門尉清経、大盗賊の多能丸、加茂の長者となっており、裁きの場であった。三人は三様の運命にもあそばれていた。

三人兄弟が、そのときの驚き喜び悲しみは、どんなであったろうか。三人兄弟が、三筋の道に別れたときは、たった一足の違いであったが、それがしまいには、こんなにも大きな違いとなっていた。